

指導者（保護者）として大切にしたいこと（その30） ～「東京2020オリンピックの新聞記事から」～

2021年8月吉日
U12部会広島地区SV
大庭 浩資

広島県バスケットボール協会U12部会広島地区の保護者の皆様、指導者の皆様、役員の皆様、いつもお世話になっております。

また、先日の「第45回 全関西ミニバスケットボール交歓大会」では、大変お世話になりました。このコロナ禍の中、広島県U12部会長を対策責任者とし、日々の検温やこまめな手洗いとうがい、マスクの着用や手消毒の徹底を図るなどなど、最大限の感染症対策を行いながらの大会となりました。

参加したチームはもちろんのこと、TOの手伝いをお願いしたチームの皆さん、また役員、審判、指導者の皆様、そして何より、受付での検温、会場各所やベンチの消毒等、感染予防にご尽力いただきました多くの保護者の皆様のおかげで、無事大会を終えることができました。心よりお礼申し上げます。

優勝した『美鈴が丘女子 MBC』の関係者の皆様、誠におめでとうございます。さすがに決勝戦は相手も強かったですが、「広島のバスケットボール、ここにあり！」を表すチームのみんなの心が一つになった見事な優勝でした。心よりお祝い申し上げます。

また広島地区代表として出場したチーム、急遽出場をお願いした「チーム広島」の皆さんも、連日たくさんのすばらしいプレーをありがとうございました。

やはり広島地区のチームが活躍したりよいプレーがたくさんあったりすることで、裏方で仕事をしている我々も、いつも以上にやりがいを感じることができました。

最後に、大会本部に挨拶に来られた他府県の関係者が、「本当にすばらしい大会で、よい思い出ができました」「全国大会より参加したい大会です」と口々におっしゃっていたことを付け加えておきます。

さて、ちょうど同じ時期に、東京オリンピックも熱戦の幕を閉じました。

そこで今回は、日々の新聞記事から、私の独断で心に残るものを拾い上げ、私なりのコメントを加えてみました。

実はこのことを始めたきっかけは、私の教え子でもあり、また私自身が一人のファンとして応援しているバスケットボールプレイヤーから、自分のプレーのことで悩んでいると相談を受けたことです。その時は「これからも周りの人への感謝を忘れず、あせらず、一歩ずつがんばろう」という月並みの言葉を返すことしかできず、何か相手の心にこちらの思いが届いた気がしませんでした。

そんな時、オリンピックの記事を読みながら、ほとんどの選手がスランプを経験したり、大きなけがをしたり、あるいはコーチと衝突したりしていること、またそれらを自分の努力や周りの人の支えで克服したことを知り、その人たちの記事を参考に叱咤激励をしようと考えたからです。

指導者の皆様、あるいは保護者の皆様の身近にも、プレーがうまくいかない、人間関係がうまくいかないなどの悩みを抱えている選手がいるのではないのでしょうか。

今回のコラムがそんな子どもたちへの励ましの言葉としての参考になれば幸いです。

スポーツですから、勝ち負けがあります。今回のオリンピックでも選手みんなが勝つための努力をしてきました。当たり前のことですが、メダルを獲得した選手は、参加し

た選手のうちのほんの一握りの人です。ほとんどの人がメダルに手が届いていないのです。でもメダルを獲得したから十分な努力をした、負けたから努力が足りなかったとか軽々しくは言えません。ましてやメダルを逃した選手が「申し訳ありませんでした」と謝罪する必要も全くありません。

ただ一つ言えることは、「それまでの努力が今後の人生に必ず役に立つ」ということでしょう。バスケットボールに限らず、やはり努力することは大切なのです。

感想を書いている、改めて「スポーツの力って本当に素晴らしいな」と感じました。拙いコメント、しかもかなり長いものになりましたが、それぞれの場面を思い出しながら、どうぞお付き合いください。

きっと、一つや二つ、今後のミニバスケットボールの指導にも役に立つものがあります（と、勝手に信じています・・・笑い）。

7月25日（日）

内村航平（男子体操）・・・「自分がダメでも、主将としてチームを引っ張る」

- ・種目別鉄棒でまさかの落下。わずか2.5秒で、男はマットに打ち付けられた。本人も「分からない」と嘆く理由なき失敗で、母国での戦いを終えることになった。「何やってんだバカ！ それ以上でもそれ以下でもない。全部自分のせい。自分に失望している」。しかし、チームメートに気を遣わせないように笑顔で声をかけ「すっきりした気持ち」と言った。「自分がダメでも、主将としてチームを引っ張ることは大切だからね」。

渡名喜風南（柔道女子48kg級）・・・「死ぬこと以外かすり傷」

- ・女子48kg級で銀メダル獲得。しかし、豊を下りると号泣。うずくまって現実と向き合った。今でも忘れられない言葉がある。不調な時期に母から送られた座右の銘の「死ぬこと以外かすり傷」を胸に刻む。今大会では日本金メダル1号の重圧がかかる中、「自分は自分」とマイペースを貫いた。「積み上げてきたことは間違っていない。自分を信じてしっかり前に進みたい」。

三宅宏実（重量挙げ）・・・「名前の由来は、3冠王」

- ・アテネ大会から5大会連続で出場。12年ロンドン大会で銀メダル、16年リオデジャネイロ大会で銅メダルを獲得。プロ野球でバース（阪神）落合博満（ロッテ）が3冠王に輝いた年に生まれたため、うかんむりが3つ並ぶ「三宅宏実」と名付けられた。今大会で競技からは引退。今後は指導者の道を目指す。

7月26日（月）

大橋悠依（水泳女子400m個人メドレー）・・・「先生を信じてよかった」

- ・競泳陣で今大会金メダル第1号となる。五輪半年前、「もう信頼できません」。練習方針で意見が合わず、平井伯昌コーチに涙で食ってかかり、平井チームから離脱。関係者は「もう戻らないかな、と本気で思った」と言う。年末の合同練習では身の置き所がなく、仲間から離れて、一言もしゃべらず練習した。そんな時、先輩の清水咲子選手や平井コーチに強引に声をかけられ救われた。腹をくくって最後の1か月を過ごし、見事金メダルを獲得した。「本当に迷惑をかけた。『何だ、こいつ』と何度も思ったと思う。私も『何で?』と思うことはあった。でも平井先生は自分を受け入れてくれた。先生を信じてよかった。自分を信じて泳いだ。うれしい気持ちと不思議な気持ちでいっぱい」。涙があふれて止まらなかった。

阿部詩（柔道女子52kg級）

・・・ 「価値ある2敗 2つの敗北が柔道人生を変える」

- ・柔道女子52kg級で金メダルを獲得。挫折があつて今がある。2つの敗北が「柔道人生を変える」転機となり、成長を加速させた。1つ目は、夙川学院1年生の全国高校総体1回戦。小学、中学と全国制覇して初戦敗退は「記憶にない」レベルだった。道場の隅で1週間ぼうぜんとして現実と向き合えず悪夢となったが苦手の寝技を特訓するきっかけとなった。2つ目は、ブシャーレ（今大会での決勝の相手）に敗れた19年11月のGS大阪大会決勝。優勝すれば五輪代表内定の大一番で敗れ、対海外戦48連勝中だった記録もストップ。「神様の試練」と号泣し泣き崩れた。5歳で競技を始めてからタイトルを総なめした天才柔道家にとって敗北は成長の糧になった。負けん気が強い天性の勝負師が経験した価値ある2敗。挫折を乗り越えたからこそ、夢の五輪王者に上り詰めた。

7月27日（火）

大野将平（柔道男子73kg級） ・・・ 「世界から称賛された所作」

- ・聖地での激闘を終えた大野は一礼すると、天井を見上げた。「日本武道館で試合できることも少なくなっているので、天井は一生目に焼き付けておこうと思った」。五輪2連覇。偉業を達成しても表情を一切変えずに畳に向かって一礼。中学3年生向けの道徳科の教科書にも、金メダルを獲得したリオ五輪の会場で、深々と頭を下げる写真が掲載され、柔道家としてのたたずまい、所作は世界が称賛する。

芳田司（柔道女子57kg級） ・・・ 「まだまだ力が足りない」

- ・初出場の芳田は銅メダルを獲得しても笑顔はなかった。畳を下りてぼうぜん取材エリアに向かい、開口一番「悔しい・・・、金メダルを目指していたので悔しい。まだまだ力が足りてない」と言うと、必死に我慢していた涙がこぼれた。8歳で始めた柔道。小学校6年間は毎朝6時から1時間以上、父子で約4kmを走るのが日課。京都府のマラソン大会で優勝するほどの実力者。その強靱な足腰と無尽蔵のスタミナで臨んだ大会だけに、「悔しい」の言葉を繰り返して挑戦は終わった。

水谷隼（卓球混合ダブルス） ・・・ 「プライドを守った監督の配慮」

- ・混合ダブルスで、日本卓球界初の金メダルを獲得。19年の大みそか。この時点で、すでにシングルス代表は、張本選手と丹生選手が当確していた。それまで日本の卓球界を支えてきたエースに倉嶋監督は言葉をかけた。「全種目出たらさすがに大変だろう。混合に出て、全種目の五輪メダルを取る初めての日本人になればいい」。シングルスを逃した悔しさに配慮しつつ、新たなモチベーションを植え付けようと語りかけた。日本卓球界のキングが東京五輪に必要なだった。女子のエース伊藤美誠に合わせられる選手も水谷が適役だった。そして二人は、奇跡の逆転から金メダルを獲得した。

伊藤美誠（卓球混合ダブルス） ・・・ 「（優勝した）自分がもらい泣き」

- ・伊藤は優勝した瞬間を振り返り、「ヤバイという言葉が最初に出てきた。日本代表のスタッフ、コーチ、監督のうれしそう顔を見て、ちょっともらい泣きしそうになったが、基本はヤバイって顔をしていた。びっくりみたいな顔」と話した。

7月28日(水)

上野由岐子(女子ソフトボール)・・・「恐怖心を向上心が勝った、389球」

- ・「13年前の北京五輪での413球を超える何かが東京五輪にはあるのか。もう北京でやりきったから。もう一度、五輪という気持ちと向き合えなかった。」「続けることに意味がある」との言葉を胸に現役でいたが、日の丸を背負う闘志は湧かなかった。そんな20年4月27日、試合で打球が顎を直撃した。「『いつまでも駄々をこねてるな』。神様が怒っているんだな」。気が付けば、自らに打球が直撃した映像を、何度も何度も見返していた。恐怖心を向上心が勝った。なぜ反応できなかったのか。事故でなく、己の未熟さ、体のバランスが崩れていると捉えた。昔のように覚悟に満ちた姿があった。集大成の登板。2回には、安打性の強烈な打球に反応して併殺。自らを助けた場面は、その賜物だった。「上野の389球」という新たな伝説とともに金メダルを獲得した。

永瀬貴規(柔道男子81kg級)

・・・「『アホか。今ならギリギリ間に合う』という恩師の一言で復活」

- ・五輪の借りは五輪で返す。17年世界選手権。「ぎぎぎいい」。右膝から変な音が聞こえた。帰国後、病院で「右膝靭帯損傷、前十字靭帯損傷」の診断を受けた。人生初の大けがで病名を受け入れられず、「明日も違う病院へ行く」と複数の病院を回った。その報告を受けた高校の恩師、松本太一さんは、こう返した。「まだ、けがを受け入れられないのか？ アホか。今なら東京五輪はギリギリ間に合うから、早く手術の段取りをしろ。絶対にあわてるなよ」。恩師はその時に五輪までの3年間の道のりを計算した。「1年休んで戻るのが1年。ラスト1年で巻き返せば、あいつならいける」。教え子はその言葉通りの3年間を歩んだ。73kg級で金メダルを獲得した大野将平選手が「永瀬の練習が終わらないから自分も終われない」と舌を巻く練習量で、見事に金メダルを獲得した。

大坂なおみ(女子テニス)・・・「この負けは、どんな負けよりもつらい」

- ・開会式では全世界のテニス選手史上初めて、聖火の最終点火者となった。ツアーや4大会よりも、夢見てきた舞台だ。「自分への期待も本当に高かった。初めての五輪。経験したことがなかった重みだった」。テニスは、優勝以外、必ず誰もが負ける。ただ「この負けは、どんな負けよりもつらい」。それ以上、言葉を出せなかった。無言で流れ続ける涙を耐え、目を見開きながら、ずっと報道陣を見つめた。それが、大坂の五輪最後の姿だった。

山本麻衣(女子バスケットボール3人制)・・・「魅力を伝えたスピード」

- ・小学4年生まで、口田東ミニバスケットボールクラブで、藤田正雄コーチ、竹岡未樹コーチの下で活動。その後、愛知県に移り、全国ミニバス、全校中学、インターハイ、Wリーグと、すべての年代で日本一を経験。1次リーグ最終戦では、無敗で勝ち進んできたアメリカに土をつけるなど、5勝2敗と奮闘。「この流れで頑張っていきたい」と手ごたえを口にしていたが、世界ランキング1位のフランスの高さに屈した。しかし、山本選手は8試合で37得点をマーク。165cmと小柄ながらスピード感あふれるプレーで存在感を発揮し、3人制バスケットボールの魅力を十分に伝えた。
24年パリ五輪では5人制バスケットボールのメンバーとして出場し、そのスピードを再度世界にアピールしてほしいですね。(大庭より)

7月29日(木)

桃田賢斗(男子バドミントン)

- ・・・ 「(直後のインタビューで)負けても言い訳せず、周囲への感謝の言葉」
- ・誰が予想できただろうか。世界ランキング1位の桃田が、世界38位の選手にストレート負けして、予期せぬ1次リーグ敗退。「試合の入りは良かったけど、途中から自分の気持ちが引いてしまった。自信を持ってプレーできなかったのも、それが良くなかった。流れを止められなくなってしまった。最後まで苦しい展開だった。このコートに立つまでにいろいろな人に支えてもらった。苦しかったが、やりきったかなと思う」。1年半前の交通事故、コロナ禍の中での練習不足や実践不足にもかかわらず、敗戦した直後のインタビューに丁寧に答える姿は、スポーツマンシップの神髄を見た気がする。

平井伯昌コーチ(58歳 競泳監督)

- ・・・ 「年をとるといいコーチングができる、コーチとして大きな経験をした」
- ・大橋悠依の2冠を演出した。大橋とは意見の衝突もあった。「指導者になった初期に大橋が来たら、指導できていないかな。紆余(うよ)曲折ありましたが、きれいにまとまった」。マラソンの名指導者・故小出義雄氏の「年をとるといいコーチングができるよ」という言葉を手づてに聞いて心に留めている。大橋について「カリカリするが、ちょっと我慢できた。コーチとして大きな経験をさせてもらった」と笑っていた。

本田灯(ともの)(水泳男子200mバタフライ)

- ・・・ 「世界と自分の差。それを知ることができたのが財産」
- ・準決勝最下位の8位通過からの銀メダル。右手を高く突き上げて左手で水面をたたく。「周りを明るく照らす存在になってほしい」という願いから「灯(ともの)」。その名の通り、喜びを全身で表した。昨秋の競泳国際リーグで海外トップと過ごした5週間。「日本のトップレベルと自分の差、世界と自分の差。それを知ることができた」と財産にした。それからの努力で勝ち取った銀メダルである。

新井千鶴(柔道女子70kg級)

- ・・・ 「あの日があって、今がある。遠回りしたが無駄ではなかった」
- ・初出場で金メダル獲得。小学生時代から「人の数倍努力」が口癖の柔道家は、高校時代までは無名だった。埼玉・児玉高の3年夏、全国高校総体を初制覇。まじめな性格で完璧主義。「柔道を言い訳にしたくない」と学業成績は3年間オール5。しかし、試合前に弱気な表情を浮かべることがあり、恩師は「不安があっても『絶好調』と返せ」と指導。勝負師としての精神面を育てた。リオ五輪代表最終選考会決勝で敗れ、涙をのんだ。「あの日があって今がある。遠回りしたが無駄ではなかった」。高校時代の目標は日本代表だったが、それを超えて27歳の柔道家が聖地で羽ばたいた。

7月30日(金)

伊藤美誠(女子卓球シングルス) ・・・ 「支えてくれた母にありがとう」

- ・卓球女子シングルスで日本人初のメダル獲得。2歳で卓球を始めた。母は伊藤を普段は溺愛したが、練習時だけは幼少期からスパルタ。「あまりにも練習が厳しいので就寝後、息をしているかが気になって口もとに手を置いて息をしているかを確認した。寝顔を見ていると、1日厳しくしたことを思い出して、苦しいだろうなと思

うと涙が出た」。それから20歳になる今まで、いったい何球を打ってきたのだろう。銅メダルをもたらした最後の1球は、気が遠くなるほど繰り返したサーブでの得点だった。「銅メダルだけど、支えてくれた母にありがとうと言いたい」。

ウルフ・アロン（柔道男子100kg級）

- ・・・ 「10年後の僕の価値観と今の僕の価値観が同じであってほしい」
- ・21年ぶりにこの階級に金メダルをもたらす。中学生2年の時に書いた作文。「夢への近道はない。こつこつと努力を重ねた先に、僕の思い描いている夢があるはずだ。努力は裏切らないと信じている。夢に向かって一つ一つ小さな目標を達成していけばその夢はかなうはずだ。これを読んでいる10年後の僕の価値観と今の僕の価値観が同じであってほしい」。この作文の通り、2度の膝の大けがを乗り越え、痛み止めを打ちながら迎えたこの日、ついに夢を実現させた。

福島由紀、広田彩花（女子バドミントンダブルス）

- ・・・ 「カバーするのは当たり前、ここにいることが奇跡」
- ・世界ランキング1位ペアが準々決勝で敗退。広田は6月の代表合宿で右膝前十字靭帯を痛めた。広田は「五輪に出られないかもしれない」と福島に謝罪した。「申し訳ないとか思わなくていい」と返され、出場を決意した。動きの範囲が狭い広田を狙われるのは想定内。福島は「自分がしっかり動こうと。出場を決めてからはカバーすることは当たり前と思っていた」と体をなげうってコート内を動き回りカバーした。福島は「ここにいることが奇跡。痛かったと思うけど、最後まで頑張ってくれた」と思いやった。「諦めずにシャトルを追えたのは、福島先輩と多くの人に支えられたおかげ」と話した直後、広田は福島から頭をなでられ「ありがとう」と言葉かけられた。

7月31日（土）

入江陵介（水泳男子200m背泳ぎ） ・・・ 「五輪4大会連続で決勝進出」

- ・この記事は、新聞の隅っこに小さく載っていました。もちろんメダル獲得も立派なことですが、個人的にはこのような記事を大きく扱ってほしいと感じました。ある意味、一つの大会でメダルを獲得するより、4大会連続で五輪に出場、そしてすべてで決勝に残ることの方がすばらしいと思います。（大庭より）
「順位も何もないというか、メダルも惜しくないし。ただ08年北京五輪から4大会連続で決勝に立った。自分を責めちゃいけないと思っています」。個人種目はメダルなしに終わったが、苦戦が続く水泳陣の中でしっかりと予選、準決勝を通過。「納得しているし、泳ぎ切ったので胸を張りたい」。

素根輝（あきら）（柔道女子78kg超級）

- ・・・ 「努力は裏切らない 『3倍努力』を座右の銘にし、練習の虫に」
- ・主審から「勝利」を告げられると、自然の涙がこみあげた。素根は両手で顔をおおい、深々と一礼。会場の拍手でさらに感極まった。「努力は裏切らない」と改めて感じた。162cmの小さな柔道家は180cm以上が多い最重量級の世界の頂に立つためには努力しかないと考えた。柔道経験者の”鬼“の父行雄さんが師匠だった。「3倍努力」を座右の銘に練習の虫となった。自宅の一部を改装してトレーニング室にして器具を設置。地元の道場で2時間けいこをした後、筋力トレーニングを納得するまで行った。さらに腕立て伏せ200回を就寝前の日課に。それでも大きな相手に押しつぶされた。母親は「情けない、あんたは。嫌だったらやめ

なさい。あんたがやめると代わりに五輪に行ける人がいるのだから」。「道着や畳を見たくない。柔道が嫌と思う時もあった。けど、この日を信じて、継続してやってきてよかった。いろんなものが詰まった特別な金メダル」。名前の通り、最高に輝く1日となった。

奥原希望（女子バドミントン）

- ・・・ 「自分が5年間やってきたことの答え合わせが終わった」
- ・優勝候補が準々決勝敗退。天井を見つめて立ち尽くした後、涙を浮かべて「自分が5年間やってきたことの答え合わせが終わった」とぼつんとつぶやいた。ずっと東京五輪での金メダルを目指してきた。解答＝金メダル。「それが永遠に解けなかったというのはすごく悔しいし、もどかしい部分もある。その答えを解くためにやるべきことはやってきて、私がたどり着く場所がここだった。それがすべてかなと思う」と話した。

8月 1日（日）

井上康生（柔道男子監督）・・・ 「これほどの幸せ者はいない」

- ・柔道男子日本代表監督を、今大会を最後に任期満了に伴い退任する。井上監督は日本男子が初のメダルなしに終わった12年ロンドン五輪後、34歳の若さで就任。その後、強化方針の改革と情熱あふれる指導力で、16年リオデジャネイロ五輪は2階級制覇を含む史上初の7階級全員メダルを成し遂げた。集大成に掲げた東京五輪も、7階級で日本男子史上最多の金メダル5個へと導いた。「こんな素晴らしい選手たちと9年間戦わせてもらった。これほどの幸せ者はいない」と涙で声を詰まらせた。選手でも金、監督でも金メダル。9年間お疲れ様。

柔道混合団体・・・ 「57年前のショック再び」

- ・「うそだろ」。繰り返される光景が信じられなかった。どの種目よりも金メダルが確実と思われていた柔道の混合団体戦。決勝のフランス戦出場の6人中4人が金メダリスト。フランスが強いとはいえ、まさか大野の出番がないまま敗れるとは。57年前、初めて柔道が行われた東京大会は、最終日の無差別級で金メダルを逃した。前日までの軽量級、中量級、重量級と全3階級を制したのに、たった1敗で「日本柔道が負けた」。それほどショックが大きかった。そして今大会、「東京大会最終日に金メダル」という悲願のもと、混合団体を最終日にもってきた。しかし、結局歴史は繰り返された。57年前の無差別級ショックと同じ団体戦ショック。もちろん、今大会柔道陣が量産した金メダルの価値なくなるわけではない。ただ、最終日の日本武道館に流れなかった君が代。柔道界のショックは、決して小さくない。

陸上男子100m・・・ 「1回で出し切るのも能力」

- ・過去最高の期待を背負った中、結果は無情。自国開催の舞台で、完全に世界の壁にはね返された。76年モントリオール五輪以来、45年ぶりに誰一人、予選を突破できなかった。
- 小池祐貴・・・ 「できる準備はやってきた。結果がこれなら、まあ実力かなという感じ」。
- 多田修平・・・ 「自分の走りができなかった。すごい緊張したが、そこで自分の走りを買けないと強い選手ではない」。
- 山県亮太・・・ 「満足いく結果ではない。悔しいです。チャンスがあるならもう1度走りたいが、1回で出し切るのも能力。あきらめます」。

8月 2日 (月)

池江璃花子 (水泳女子400m)

- ・・・ 「この舞台に戻れたことは自分自身に誇りを持っていける」
- ・引き揚げる途中で、もう泣いていた。池江が号泣した。あまりの泣きっぷりに、五十嵐からぼんと肩をたたかれる。何度聞いても切なくなる。東京五輪のヒロイン候補が19年2月に白血病。前向きな池江が「死にたい」とさえもらした。「この数年は本当につらかったし、人生のどん底に突き落とされてここまで戻るのは大変だった。2大会連続で、この舞台に戻れたことは自分自身に誇りを持っていける」。初出場の16年リオデジャネイロ五輪で忘れられない光景がある。100mバタフライで日本新3連発。大躍進の5位。だが帰国した際に空港でメダリストとそれ以外で帰り道が分かれた。メダリストは帰国会見。それ以外は解散。「五輪はメダルをとらなきゃ意味がない、五輪は出るだけじゃ面白くない。結果を出して初めてオリンピックで戦ったという気持ちになる」。目標は24年パリ五輪、本職での100mバタフライでの金メダル獲得だ。

男子バスケットボール

- ・・・ 「勝ち切るための力は、本当の意味ではついていなかった」
- ・番狂わせが起こりにくいバスケットボール。奇跡と呼ばれるようなサプライズを起こしたいと臨んだ今大会であったが、目標としていた「1勝」には手が届かなかった。最強布陣と言われたチームでも、世界の壁は厚かった。八村 塁・・・「負けてしまったが日本はまだ若いチーム。結果は出てないが、ぼくらの感覚では食らいついていると思う」。
- 渡辺雄太・・・「間違いなく前回のワールドカップより成長できた。ただ勝ち切るための力は、本当の意味ではついていなかったんだなと感じた」。
- 富樫勇樹・・・「(167cmの身長でも)長く夢見てきた舞台上でプレーできたことに感謝。世界の壁を改めて実感したが、その差が少しずつ縮まっていることも感じた」。

松山英樹 (男子ゴルフ) ・・・ 「それでも経験できたことは良かった」

- ・3位で7人が並び、銅メダルをかけて臨んだプレーオフで敗退。「メダルを取りたいという思いは強かったので悔しいですね」。厳しい顔で汗をぬぐった。大会前には新型コロナウイルスに感染して調整も狂った。感染後の試合出場はかなわず、体調も万全ではなかった。それでも言い訳は一切せず、マスターズ覇者として、日本の代表として、力は示した。「マスターズの方が比にならないぐらい緊張したが、それでもこの舞台を経験できたことは良かった」。

8月 3日 (火)

村上茉愛 (女子体操種目別床運動)

- ・・・ 「(すべてが分かる) 家族がいたから、ここまで続けられた」
- ・日本女子初となる個人種目でのメダルを獲得。「リオから昨日まで泣き尽くしたぐらい泣いた。この5年間は長くて辛くて苦しいことばかり。今日は笑おう楽しもうと思って臨んだ。演技の1分半が終わってほしくないなと思って、自然と笑顔になった。「よく耐えて頑張った。あれ以上の演技はできない」と瀬尾コーチ「体操人生で一番いい演技。自分に金メダルをあげたい。本当に続けてきて良かったな。母、家族がすごく自分の一番の支えで。性格、気持ち、感情が分かる家族がいたから、ここまで続けられた。よいお土産がもって帰れるかと」。

文田健一郎（男子レスリンググレコローマンスタイル60kg級）

・・・ 「重い、重い、・・・とても重いメダルでした」

- ・父が今も指導する高校で、文田のレスリング人生はスタートした。同学年の女子の相手に連れ出されたのがきっかけだが、練習が嫌で嫌で、サボることばかり考えた。不真面目そのもの。逃亡もした。「チョコパイ買ってあげるから」「パフェ食べさせてあげるから」。父は引き留めに必死だった。気持ちが動いたのは1つの映像。父が見せた世界の投げ技集。息子はついに宣言した。「レスリングやります」と。そこから投げ技にこだわった父子の練習が始まり、見事銀メダルを獲得した。試合後のインタビューでは、「（言葉に詰まりながら）重い、重い、・・・とても重いメダルでした」と答えた。

橋岡優輝（男子走り幅跳）・・・ 「この悔いを返す。3年ある」

- ・日本勢が36年ベルリン五輪銅から85年間遠ざかるメダルには届かなかった。橋岡の最後の跳躍は8m10cm。3位銅メダルの記録は8m21cm。歴史的なメダルには12cm届かなかった。決して調子は悪くなく、五輪前の6月の2試合では8m23cmと8m36cm。いずれも銅メダルの数字を上回っていた。その事実も悔しさを増幅させる。「周りはトップ選手ばかり。独特の雰囲気がある試合で、体が想像通りに動かなかった」。これからは拠点を海外に移すことも検討する。「もっと海外選手と知り合って、いい雰囲気ですら試合に臨むことも必要。この悔いを返す。3年ある」。24年パリ五輪への思いを強くした。

8月 4日（水）

為末大氏（元陸上選手）のコラムより

・・・ 「なぜ多い？ 注目選手の敗退、初出場選手の躍進」

- ・私の経験では、五輪という場所は知らないか知り尽くすか、どちらかが最もパフォーマンスが良いと思っていました。知り尽くす方はなんとなく分かると思いますが、知らないメリットはどんな部分にあるのでしょうか。人間は不思議なことに相手を知り、自分を知りすぎると、自分自身の位置を自分から固定するようなことがあります。「自分はこういう選手である」と決め過ぎてしまうのです。そうなるとありえないような伸びを想像できなくなるし、想像できないので実現できなくなります。安定を手に入れ自分の地位を固定する。それは結果の安定を生みますが、驚くような結果を出せなくなるということでもあります。一方、五輪を知らない選手は戦力的には未熟でも、今この瞬間に思い切り力を出すことができます。もう少し端的に言えば、五輪を知らない選手は思い切りがいいです。後先考えず思い切ってプレーする時、大半が自滅するのですが、その中の一握りがそのまま力を出し切り続けてしまうことがあります。初めての五輪にはこれがあります。今大会は、このような新鮮な気持ちで挑んだ選手たちの躍進が多いと感じています。

※ この話は、選手自身についての内容ですが、指導者にも当てはまるのではないのでしょうか。ミニバスケットボールの指導においても、指導者の固定概念で、チームの力を決めつけたり、選手の力を決めつけたりするのではなく、チームや選手の未知なる可能性を常に追求し引き出してやる必要があります。つまりコーチングの三つの原則である、①「答えはその人の中にある」 ②「人は無限の可能性を持っている」 ③「一人より二人の方が答えを見つけやすい」が改めて大切であると感じました。（大庭より）

サニブラウン・ハキーム（男子陸上200m）・・・「もはやジョギング」

- ・21秒41は、自己記録から1.3秒以上遅れた。失格者を除き、2組の最下位。ぼうぜんとして声を絞り出した。「自分でも何であんなに遅かったのか分からない。最後の100mは、もはやジョギングぐらい遅かった。予選で落ちるのは初めて。ちょっと何とも言えない。ひどすぎますね」。調子は「悪かったわけでもない」。体も「痛いところも全然ない」。100m、200m両種目に代表が出場した五輪で、全員が初戦から次のラウンドへ進出できなかったのは、93年ぶりの屈辱になる。自国開催の五輪で、まだ世界との差を埋められていない現実を突きつけられた。

入江聖奈（女子ボクシングフェザー級）

- ・・・「逆上がりもできないくらいの運動音痴の私でも、
努力をあきらめないなら何かをつかむことができる」
- ・「あなたが10歳の時の夢、世界一のボクシング選手になって心も体も強くなりたいたいという夢に向けてがんばっていますか」。10年前、10歳の入江は半分成人式の「20歳になった自分へ」で、そう書いた。小2でボクシング漫画「がんばれ元気」に衝撃を受け、グローブを握った。しかし自他ともに認める運動音痴でまったく才能はなかった。それを支えたのは努力。ジムの近くの標高263mの鳥取城を駆け上がり、米子市の砂浜を走った。その積み重ねで、初出場での金メダル獲得を成し遂げた。「逆上がりもできないくらいの運動音痴の私でも、努力をあきらめないなら何かをつかむことができると教えてあげられたのかな」。

8月 5日（木）

川井友香子（女子レスリング62kg級）

- ・・・「どんくさい。運動神経もよくない。でも『いつか私も』」
- ・おとなしい少女だった。「運動は嫌い」。手芸が大好き。ただ川井家にはレスリングがあった。母初江さんがコーチを務める教室に姉（川井梨紗子）と三女が通い、試合の日は構ってもらえなかった。それが寂しかった。母親に構ってほしい一心で小2で競技を始めたが、前向きにはなれなかった。「どんくさい。運動神経も良くない。最後の1人に残るまで練習しました」。姉の練習パートナーとして同行したリオ五輪で「いつか、私も」と視線が上がった。「いつか追いつけるように」と姉の背中を追い続けてきた。これまでは引張られた。その決勝で、半分は姉なしで戦い抜いた。精神的な自立、たくましさでつかんだ金メダル。

トム・ホーバス（女子バスケットボール監督）

- ・・・「『東京五輪では金メダルをとる』と言い続け、ブレない指導」
- ・2点を追い、残り20秒弱。パスを受けた林は落ち着いていた。マークを外し、少し下がりながら両手で3点シュート。きれいな放物線を描いたボールがネットを揺らした。小さくガッツポーズをつくったが、残り時間がある。リードは1点。決められれば敗退。タイムアウト後の約16秒。相手のシュートが外れるまでが長く感じた。劇的逆転で初の4強入り。ついにメダルが見えた。17年就任、元NBA選手で日本でもプレーしたトム・ホーバス監督のもと、チームは走り続けるバスケットを標榜（ひょうぼう）してきた。日本語がうまいホーバス監督は「東京五輪では金メダルを取る」と言い続け、選手たちも「目標は金メダル」と口にするようになった。193cmのエース渡嘉敷がメンバーから離脱し、戦力は大幅にダウンしたかと思われ、期待もしぼみつつあった。しかし、逆にチームは団結。ホーバス監督の指導

はブレなかった。4強入りしても林は真顔で言い切った。「勝ちます。どこがきても勝つ。絶対勝って金メダルを取りたい」。この言葉を信じ、画面を通じて後押しするだけ。そんな局面が現実にはやってきた。

四十住（よそずみ）さくら（女子スケートボードパーク）

- ・・・ 「『その傷、痛ないんか？』『痛くなくて楽しいです』」
- ・スケートボードとの出会いは小6だった。両親は反対したが、娘は折れなかった。その姿に母が腹をくくった。学校、塾が終わった午後7時、和歌山から大阪に車を走らせた。夢中で技を磨く四十住は、時に午前2時まで滑った。デッキ（板）や靴の消耗は激しく、遠征費も自己負担。家計は苦しかった。4年前、高1の秋、地域貢献を模索していた地元和歌山の時計店「オオミヤ」を訪れた。「その傷、痛ないんか？」向かいに座った出水孝典社長に突然尋ねられた。半ズボンから見えた脚は傷だらけだった。「痛くなくて楽しいです」。その輝く目を見て、社長は「こんな純粋な子がいるのか」と活動費の援助を決めた。あれから4年。五輪の表彰台で金メダルを下げた。「金メダル、すごく重たいです。スケートボードが大好き。楽しくやれていたし、それが結果につながったと思います」。

8月 6日（金）

川井梨紗子（女子レスリング57kg級）

- ・・・ 「こんな幸せな日があつていいのかつてぐらい本当に。夢見たい」
- ・戦いを終えた川井は、マットの中央に向けて、深々とお辞儀をした。2連覇を成し遂げても、涙はない。スタンドで目を赤くする妹に対して、むしろ引き締まった表情が印象的だった。世界選手権代表の母初江さんの下、姉妹で人生をささげてきた。「こんな幸せな日があつていいのかつてぐらい本当に。夢見たい」。試合後のお辞儀は、その感謝の証にも映った。

清水希容（女子空手形）・・・ 「やっぱり金メダルがよかったな」

- ・清水の目から涙がこぼれた。「やっぱりここまでくるのにすごくしんどかったの。ここで勝たなかったですけど、悔しいです。ただ自分を褒めてあげたい。今日には自分という『形』を打とうと思った」。中学卒業後、母の反対を押し切って強豪高校に進学。朝は4時に起き、6時までには学校へ着く毎日。上下関係における礼儀や責任感を身につけた。その後も努力を続け、世界選手権優勝。16年には空手が五輪に追加された。清水は、女子『形』のシンボリックな存在となり、競技を広める役割を担った。負けられない重圧も背負った。「日本の代表として負けてはならない。最近5年間は勝ち負けを気にして自分の演技ができなかった」。心が苦しくなった。「やっぱり金メダルがよかったな。やるだけのことはやったが、やっぱり悔しい」。次は世界選手権での金メダル奪還を目指して、日々の精進を続ける。

田中亮明（男子ボクシングフライ級）

- ・・・ 負けて潔よし「あいつを倒したかったですけど、うまかったですね」
- ・「最高の気分を味わえた。五輪があったから。関係者のみなさんに感謝したい」。すがすがしさを胸に、リング上でお辞儀した。その態度はやり切った充実感にあふれていた。試合後の取材エリアでの出来事だった。「最後まで倒そうとする意志を貫けたか」と田中に聞くと、ちょうどその後方を、拳を交えたパーラムが通過した。頭をなでられ、今度は笑顔を交わす。「あいつを倒したかったですけど、うまかったですね」。その言葉は真っすぐだった。相手の力を認めた見事な銅メダルだ。

8月 7日 (土)

喜友名諒 (男子空手形) . . . 「沖縄の歴史を刻むことができうれしい」

- ・勝利の後で、喜友名が、畳の中央に正座して深く一礼した。その理由を聞かれると目頭を押さえて沈黙。「まずは母親に、しっかり優勝したよ、約束は守ったよ、と報告しました」と男泣き。金メダルは2年前に57歳で亡くなった母の願いだった。
「沖縄の歴史を刻むことができうれしく思う。五輪は一番注目される場所。沖縄の子どもたちにも、夢をあきらめず、追いかけて続ければ、達成できることを知ってもらえたと思います」。沖縄県人初の金メダリストは、故郷に帰ったら、母の墓前で優勝を報告する。

張本智和 (男子卓球団体)

. . . 「被災地の方々に、諦めない姿を少しはお見せできたと思う」

- ・命。生と死。18歳の張本は本気で考える。「今日が最後かもしれない。なにをやるにしても真剣に取り組もう」と。2011年3月11日。東日本大震災に襲われた小1の張本は、宿題途中の鉛筆を片手に、避難先の萩野町公園に立っていた。雪がばらつく。大地震の後には天候も荒れるのかと、不思議に思った。10年後、日本代表として東京五輪の舞台に立っていることなど、頭の片隅にも想像できなかった。自宅からわずか数km先、同じ仙台市内を大津波が襲った。自宅がある宮城野区と隣の若林区で647人もの命が奪われた。母にも「震災を忘れてはいけない」と教えられた。震災10年を迎えた今年、当時同じ小学生だった子どもたち74人が一気に犠牲になった「大川小の悲劇」についても知った。「亡くなった方々を胸に刻んで戦う」。そう誓って東京体育館のコートに立った。「勝敗にかかわらず1球も諦めない決めて戦ってきた。その姿は被災地の方々に少しはお見せできたと思う」と話した。「1秒でも早く仙台にメダルを持ち帰って、皆さんにお見せしたい」。

8月 8日 (日)

稲葉篤紀 (野球監督) . . . 「(選手を守り抜く覚悟) 僕は何を言われてもいい」

- ・五輪の重みを受け止めてきた。過去の五輪でも長嶋監督が病に倒れ、星野監督が非難にさらされた。「星野さんのお孫さんも学校でいろいろ言われたと聞いた。自分の子どもも言われるかもしれない。僕は何を言われてもいい。選手は家族を犠牲にして日の丸を背負っている。どんな結果であれ、選手を守り抜く覚悟だ」。「僕ら(スタッフ)がキュウキュウと考えているのに、なんで選手たちは楽しんでやっているんだろう? すごいね」。指揮官の思いに選手の感性が融合され、歴史を塗り替えた。首元にさがる黄金色のメダルは心地いい重さだった。

坂本勇人 (野球)

. . . 「年齢は関係ない。一人一人がチームをいい方向にと思ってやること」

- ・坂本は心優しき兄貴分だった。不振に苦しむ中、必死に顔を上げる鈴木誠也につきっきりで寄り添った。韓国戦前の声出し役には幼馴染のマー君を指名して、どこもなく漂う元メジャーリーガーとの距離を取っ払った。決勝では自らが輪の中心で声を張り上げた。試合では犠牲バントを志願し、チームの勝利に貢献した。「自覚してやる選手たちが集まる。グラウンドに出れば年齢は関係ない。一人一人がチームをいい方向にと思ってやることが一番いいことだと思う」と繰り返し言い続けた。坂本の姿勢は、心を寄せあえる最強のチームになった。

馬瓜（まうり）エブリン（女子バスケットボール）

・・・ 「笑顔になるために見つけた『新しい技』」

- ・両親がガーナ出身の馬瓜エブリンは、3人制バスケットボールでベスト8進出に貢献した妹ステファニーに続き、大舞台で躍動した。エブリンが14歳でU16日本代表に選出されたことを契機に、「日本代表として国際大会に出場したい」という気持ちを尊重し、家族全員で日本国籍を取得した。母フランシスカさんは、「子どもたちの将来のことを考えた。提出する書類がいっぱいで、国籍を変えるのは大変だった」と振り返る。文章を書くことも得意だった少女は中学1年の時、法務省が主催する全国中学生人権作文コンテスト中央大会で、人権擁護局長賞を受賞した。タイトルは「笑顔になるために」。自分の出自に関する葛藤と正面から向き合い、思いの丈をつづった。「母に『どうして私は日本語がしゃべれるのに、肌や髪や体はちがうの?』と質問しました」。悩む娘を案じた母は、「人と違うところを悲しむのではなく、喜びを持って、最大限に生かしなさい」と助言した。それでも心ないからかいが耳に入ってくるが、エブリンは再び母のアドバイスを受け、乗り越えるための「新しい技=悪口を言われても、認めて、面白いことに変えてしまおう」を取得。そして笑顔の大切さを提唱した。開会式で男子バスケットボールの八村塁が旗手、女子テニスの大坂なおみが最終聖火ランナーを務めた今大会。5人制と3人制、それぞれのコートで爽やかな笑顔を振りまいた馬瓜姉妹も、「多様性と調和」の大会テーマを象徴する存在として輝いた。

8月 9日（月）

本橋菜子（女子バスケットボール）

・・・ 「子どもたちもその時にできることをやっていた。一緒に頑張れた」

- ・本番8か月前に前十字靭帯損傷。復帰は絶望的だったが、代表のもとでリハビリを行い、トレーナーが止めるまで練習を続けた。昨春、コロナ禍で埼玉の実家に帰省中、近くの公園で地元の小学生と交代でシュート練習をした。顔見知りになり、最後に「本橋選手のようにになりたい」と書かれた手紙をもらった。「子どもたちもその時にできることをやっていた。一緒に頑張れた」。7月。ホーバス監督から代表選出を聞いた時は、その場で泣き崩れた。165cmの小さな司令塔は、短時間当たりの得点はチームトップだ。例えば準々決勝ベルギー戦では、約10分の出場で10得点。「大事な場面で本橋を使う」というホーバス監督の期待に応え、決勝戦でも約18分出場で16得点と活躍した。膝の靭帯大けがを乗り越え、「スーパーサブ」として、自分を選んでくれたホーバス監督に恩返しした。

林咲希（女子バスケットボール）・・・ 「お父さん、頑張ったよ」

- ・17年8月、バスケット界に導いてくれた父・豊樹さんが、がんで亡くなった。愛娘の最後の応援は、亡くなる直前の代表戦。余命が迫り、医者から止められた。それでも「最後かもしれない」と指示書を書いてもらい、勇姿を目に焼き付けた。2週間後、林は海外での試合中に訃報を聞いた。今大会も父が見守ってくれていると思いながらプレー。「あの時も（父は）やり切ることを望んでいたもので、今回もやり切った。近くで応援してくれてると思っていたので、不安もなかった」と達成感にあふれた。希望の花が咲くようにと、咲希と名付けられた。豊樹さんのように誰からも慕われ、自分に厳しく戦い抜き、東京五輪のコートに立った。準々決勝では、83-85の第4Q残り15秒からの逆転の3点シュートを決め、チームを救った。「（決勝は）負けたけど、1番いい報告になった。お父さん、頑張ったよ」

女子バスケットボール・・・「日本初のメダル、誇りに思いたい」

- ・平均身長は出場12か国中2番目に低い176cm。そのハンディを克服すべく、日本は外角シュートを多用する戦術で勝ち上がったが、最後は米国の高さで強さに屈した。大黒柱の渡嘉敷が離脱し、大きく戦力ダウンしたかに見られた中で、全員が一丸となって前評判を覆した。ともすれば男子に注目が集まりがちだったバスケット界にあって、女子が巻き起こした大旋風。

高田真希（主将）

「狙っていた金メダルに届かず悔しいが、日本初のメダル。誇りに思っています」

町田瑠唯（162cmのガード）

「相手は世界のナンバーワンだと感じたが、まだまだ自分たちもできそう」

ホーバス監督

「米国のディフェンスがすごかった。勝ちたかったし悔しい。最後までよく頑張った選手たちに感謝。これからの日本は、新しい時代になる」

8月10日（火）

女子バスケットボール（記者会見にて）

- ・・・「小さな選手が大きな選手に勝てることを証明できた」
「スキルとかフィニッシュ力とか、すべては基本が大切」
「シューターもドライブインを」
「日頃から相手を意識した練習が大事」

・トム・ホーバス監督

体格面で劣る中でチームは、スピードや運動量を武器に快進撃を続けた。何度もプレーを止めて確認作業をするほどの「細かすぎる」といわれる戦術と、日本代表合宿では質量ともに「世界一」という猛練習でチームを銀メダルへと導いた。

「日本の選手たちはあまり大きなことを言わない。でもやる気持ちは強い。その気持ちを引き出すために、僕は熱い気持ちで話をしてきた。日本のレベルは間違いなく上がった」といつもの日本語で熱弁した。

・高田真希（主将 185cm）

「正直、練習はきつい。体力的な部分だけでなく、フォーメーションなど覚えなくてはいけなくて量が多く、頭を使う。細かいところをやらないと勝てないと教えられてきた。今回やってみて、そこが重要と改め感じた。でもスピードや運動力を武器に、小さな選手が大きな選手に勝てることを証明できた。子どもたちに元気や勇気を届けられたと思う」と満足そうに話をした。

・町田瑠唯（162cm）

「スキル力とかフィニッシュ力とかをもっと磨かないといけない。すべては基本の繰り返しです」と早くも次を見据えた。

・宮沢夕貴（183cm）

「シュートを思うように打たせてもらえなかった。シューターも外からのシュートだけではなく、もう少しドライブインとかができたら展開が違った」と語った。

・赤穂ひまわり（185cm）

「国内だと少ないが、決勝ではすごくブロックされた。日頃から自分よりも背の高い相手を意識して練習していくことが大事」と課題を挙げた。